

野獣な御曹司の束縛デイズ

目次

野獣な御曹司の束縛デイズ

5

囚とらわれた御曹司の甘い日々

231

野獣な御曹司の束縛デイズ

「ん、ふう、ん……」

水瀬綾香はそっと目を瞑った。男の熱い舌がねつとりと自分の舌に絡み、甘いカクテルの残り香に頭がくらくらしてくる。

「お前、甘い……な」

わずかに舌が離れ、低く、掠れた声が鼓膜を刺激した。

（似てる……。あの人の声に）

うつすらと目を開けると、熱を帯びて光る相手の瞳が霞んだ視界に映し出された。

深い口付けに翻弄され、ぼうつと立っていた綾香の背に大きな手が回る。続いてドレスのファスナーが下ろされる音がした。

綾香の体を覆っていたブルーのサテンドレスが、するりと滑り落ちる。深い襟ぐりに青色の小花を散らしたデザインで、薄いブルーのオーガンジーを重ねたブライズメイドのドレス。今日は妹である綾菜の結婚式だったのだ。

くすり、と笑い声があった。

「何だか不満そうだな……脱がされなくなかったのか？」

（せつかく綾菜がオーダーしてくれたのに。皺になっちゃう）

綾香は少し憎らしくなって前に立つ男を見上げた。身長一七〇センチの綾香が自分を小さく感じるほど、彼は背が高い。男性にしては整いすぎとも言える顔立ちは、どこか肉食獣のような雰囲気漂わせ、黒の礼服がその際のなさを強調していた。

レースの下着の上から、そっと胸を包まれる。大きな手に揉みしだかれて、思わず溜息と共に甘く掠れた声を上げた。

「あ……ん……」

今、自分がこうしていることが信じられない。今日初めて会った男と二人でホテルにいるなんて。司という名前、そしてあの人——妹の結婚相手である海斗さんの親戚だつてことしか知らないのに。引き返すなら今のうち——心のどこかで、そう思う自分がいる。でも……

真つ白なウエディングドレスを着た妹の隣に並ぶ、白いタキシード姿の海斗。

綾香の頭に彼の顔が浮かんだ。幸せそうに笑うあの人笑顔が。

——ずきん、と胸の奥が痛くなった。

綾菜にだって、あの人にだって、この思いは知られていない。これからも自分一人の胸の中にならずと閉じ込めておくつもりだ。

それでも、二人が結婚式を挙げた今夜だけは……この痛みを一人で抱えていたくない。飲み過ぎたカクテルの魔法が、綾香を捉えて離さなかった。

(お願い……今夜だけは)

躊躇うもう一人の自分を振り払うように、綾香は男の体に手を伸ばし、その首に縋りついた。

「一人に……しないで」

切羽詰まった声。それを聞いた男は、力強く綾香を抱きしめ、耳元で囁く。

「離してくれと言っても離さない」

背筋が震えた。あまりにも彼と似ている、その「声」に。そのまま綾香は逞しい腕に抱き上げられ、ベッドへと運ばれていった。

「あああつ……!」

経験したことのない感覚の波に、綾香は翻弄され続けていた。剥がされた下着の中に隠されていた白い肌は、男の唇と指が触れるたびに、びくびくと小刻みに震えた。

「感じやすいな。お前」

執拗に胸の頂を舐められ、時に強く吸われる。そのたびに、綾香の口から喘ぎ声が漏れた。もう片方の頂も、長い指に弄ばれる。もう、何も考えられない……考えたくない。

普段なら絶対出てこない感情が、今、綾香をこの場に縛りつけていた。

「あ、あああんっ!」

いつの間にか、大きな手が綾香の太腿を割り開いていた。秘所を探られ、背中がびくんと反る。柔らかな髪をなぞるように動く指。その動きに合わせて頭のとっぺんからつま先まで、びりびり

と甘い痺れが走る。

「ん、あ、いやっ……!」

今までにない熱さと昂ぶりが、綾香を襲った。ぬちゃっ、と恥ずかしくなるような水音がベッドの上に響く。綾香は目を瞑り、首を横に振った。

「本当に、嫌か?」

含み笑いをしながら、白い肌に痕を残していく男の唇がひどく熱い。舌が、指が、綾香の体の敏感なところを暴いていく。

突然、花びらに隠された突起を摘まれて、思わず甘い悲鳴を上げた。くぶり、と二枚の襷の間に彼の指が埋まる。その指の先が動くと、痛みのような、痺れのような感覚に包まれた。

「だっ……て……っ、あんっ……!」

——初めてだから。二十七歳の今まで、何も、知らなかったから。こんな荒々しい感情も、意識が飛びそうな快感も。

自分の肌に擦れる、張りのある肌が心地よい。素肌同士が触れ合うと、こんなに気持ちいいんだ……

綾香は手を伸ばして、男の厚みのある胸板を撫でた。すると、「んっ……」と低く掠れた声が聞こえて、思わず胸が熱くなる。

(本当に似てる……)

目を瞑ると、あの人がここにいるようで……彼は他の女性と——妹と結婚したのだから、そんな

ことはあり得ないのに。

(でも、今だけ……)

夢を見たい。あの人が私を求めてくれていて。ずっと隠していた、報われない私の思いに、気が付いてくれていたって。

うっとりとした笑みを浮かべて、綾香は呟いた。

「……海、斗さ……」

——その途端、時間がびたり、と止まった。

「ん……？」

綾香は重い臉を開ける。あれほど自分を貪っていた唇も手も、全ての動きを止めていた。

綾香の目の前にあるのは、冷たく光る漆黒の瞳。まだ全身の疼きが収まらない綾香は、次の瞬間、男の口から漏れた言葉に凍りついた。

「海斗……？」

(しまった！ 私、今……っ)

思わず顔を引き攣らせた綾香を見て、男の顔から表情が消える。

「お前、あいつと関係があるのか」

「……」

脅すような声色に、さつきとは違う理由で背筋が震えた。男の声からは先ほどまでの激情が消え、代わりに抑え切れない怒りが込められているのが分かる。綾香は何も言えず、ただ震えながら男の

冷たい瞳を見返すだけだった。

彼は、何も纏っていない綾香の体を頭からつま先までざっと見た後、体を起こしてベッドから離れた。綾香は足元でくしゃくしゃになっていたシーツを震える指先で引っ張り上げ、頭から被る。

男が服を着る気配はしたが何も言えず、彼に背を向けてシーツの中で震えていた。涙がじわりと滲んでくる。

「今日、あいつが結婚したから……」

低い声にびくり、と肩が震える。

「俺を代わりにしたのか」

断定にすら聞こえる口調に、小さく「ごめんなさい」と返すのがやっとだった。

「馬鹿にするな」

吐き捨てるようにそう言い残し、男は部屋を出て行った。

やるせなさや罪悪感など、様々な思いがモザイクのように入り混じる。残された綾香はそんな心を抱えながら、一人泣き続けることしかできなかった。

* * *

——どうして、こんなことになってしまったんだろう。

解けた魔法から逃げるように住み慣れた古いアパートに帰った綾香は、ベッドに頭を埋めながら

自己嫌悪と戦っていた。

(いくら綾菜と海斗さんの結婚式の後だったからって、あんなこと……っ！)
何も考えたくなくて、一人になりたくなくて、目の前の彼に縋すがってしまった。その挙句……
ふう、と深い溜息をついた綾香の心に、半年前の光景がよみがえってきた。

『お姉ちゃん、私、海斗さんと結婚したいの』

愛する男性に手を握られながらそう告げる綾菜を見た時、綾香の胸を過ぎったのは、『ああ、やっぱり』という思いと、『認めたくない』という二つの思いだった。

自宅のダイニングキッチンテーブルを挟んで座る妹を冷静に見る。茶色つぼいくせ毛で、少女のような優しげな雰囲気。

『でも、あなたはまだ大学二年でしょ？ 早すぎるんじゃない？』

何とかそれだけ言うと、綾菜は首を横に振り、隣に座る男性——小野寺海斗を愛おしげに見上げた。

『私、早く自分の家族を持ちたい。大学まで行かせてくれたお姉ちゃんには申し訳ないんだけど……でも』

お姉ちゃんみたいに、キャリアウーマンになりたいわけじゃないの、と綾菜は言った。

『海斗さんも、早く結婚したいって言ってくれてるし……私も、海斗さんの傍にいたい』

頬を染めながら言う綾菜は、本当に愛らしかった。

可愛くて優しい、たった一人の大事な妹。母が亡くなり、頼れる身内が一人もない中、自分が母親代わりとなって懸命に面倒を見てきた。

その綾菜が海斗と出会ったのは、わずか半年前のこと。海斗が社長を務める小野寺商事で、社長秘書を務める綾香。その日、妹は自分に忘れ物を届けようと会社まで来てくれたのだ。妹を一目見て、偶然そこにいた若き社長——海斗は足を止めた。

見たことがなかった。……あんな表情をする社長なんて。今まで、どんな美女に迫られてもスマートに退けていたのに。

綾菜も海斗を見て頬を真っ赤に染めていた。

大切な妹と、長年思い続けてきた相手が、恋に落ちたのだとすぐに悟った。だから綾香が真っ先にしたことは、海斗への思いを胸の底に封印することだった。

秘書という仕事柄、感情を隠すことに慣れているから、それは簡単なことだった。

——ただ、切り刻まれたような胸の痛みだけは封印し切れなかったけれど。

『綾菜は二十歳になったばかりだから、綾香も心配だろうけど……綾菜のことは大切にす。傍にいて、守ってやりたいんだ。俺のこの手で』

真摯な態度で、そう海斗に言われた綾香は、溜息をつきながら、『結婚しても、綾菜が大学を卒業すること』を条件に、二人の結婚を許したのだった。

そして今日の午後、二人の結婚式がとある教会で厳かに行われた。

『では、誓いの口付けを』

神父の言葉に促され熱い口付けを交わす二人は、胸が痛くなるくらい、幸せそうだった。

『おめでどう、小野寺社長！』

『いやあ、本当に綺麗な花嫁で……』

その後、場所を移して開かれた立食パーティーで招待客達が歓談にざわめく中、綾香はシャンパングラスを片手に、一人壁際に佇んでいた。穏やかなBGMが流れ、着飾った女性達が会場を歩き交う。会社社長の結婚式ということもあって、即席ビジネス会議を行う男性グループまでいた。

(ブライズメイドの大役も果たしたし……やれやれよね)

ちら、と自分の着ているドレスに目をやる。上半身のラインを引き立てるデザインは、いつも着ているビジネススーツとは大違いだ。とはいえ、『お姉ちゃんはブルーが似合うから！』と主張する綾菜がオーダーしてくれただけあって、鏡に映る自分の姿は普段より綺麗に見えた。

(でも……)

雪のように真っ白なウエディングドレスを纏った綾菜は、もつと綺麗で……

式で付き添っている間も、綾香は複雑な思いでいっぱいだった。姉として誇らしい気持ちと、女として負けたという気持ち。そしてその思いは、今も綾香の胸を占めている。

シャンパンをぐくりと飲み、気を紛らわせる。

(今日はもう、やることもないし……少しくらい酔っても大丈夫よね)

『お姉ちゃん、当日裏方に回らないでね！ちゃんとお客様として楽しんでよ！』という綾菜の要

望で、全ての段取りは前日までに終わっている。今はこうして披露宴代わりの立食パーティーの成り行きを見守るだけで良かった。

(本当に、海斗さんのおかげで助かったわ……)

彼は、綾香以外身寄りのない綾菜の事情を考慮し、普通の披露宴ではなく、立食パーティーの形にしてくれたのだ。そのため招待客も、新郎側、新婦側の区別がつかなくなっている。

とはいえ、大半は新郎側の招待客だろう。

海斗は、日本でも有数の財閥である藤室家の出身なのだ。

『どうせ俺の親戚達は、俺の結婚式なんてビジネスの会食代わりにしか思ってないよ。根っからの商売人だから』

海斗はそう言っただけで苦笑していた。どうやら藤室家は、こういった冠婚葬祭の際に格式を重んじる家風ではないようだ。

一方の綾菜側は、姉である自分と、大学までの友人しか参列していない。故に若い女性が大半だ。その友人達は、いそいそと若い男性グループに話しかけている。何だか婚活パーティーを見ているような気がしてきた。

ふと、高砂席を見る。頬を上気させた綾菜と、幸せそうに笑う海斗の姿。本来、海斗の秘書でもある自分が傍に行っただけで、二人のサポートにつくべきなのだろう。でも……

(おめでどう、って言うのが精一杯だった……)

シユワシユワと泡が弾けるシャンパンを再び口に含む。アルコールが苦手な綾香でも、その口当

たりの良さは分かる。

社長の結婚式だから最高級のものを手配したけれど、その甲斐はあったかな……とぼんやり思う。
——海斗さんのことは、もう思い切らないといけない。

分かっているのに、心がついていかない。

小野寺商事に入社して以来、ずっと心に秘めていた海斗への思い。

「女の秘書は、海斗社長にのぼせ上がって使い物にならなかった」と、先任の秘書である松原から引き継ぎの時に聞かされた綾香は、まず自分の感情を殺し、海斗のサポートが完璧にできるような力を尽くしてきた。その甲斐あってか、海斗は綾香を秘書として心から信頼してくれるようになった。

『松原は父の代からいてくれた秘書だが、彼以外で君のように優秀な秘書はいなかったよ、水瀬。君がいないと、俺は仕事になりやしないよ』

『ありがとうございます、社長』

海斗の褒め言葉を聞きながら、いつか「秘書」としてではなく「女性」として必要に思ってくれることを密かに夢見ていた。馬鹿みたいに、一途に。

(本当、馬鹿だったわよね……)

海斗に恋している素振りなんて、一度も見せたことがない。仕事のサポートに徹するあまり、彼には戦友扱ひされていたのに。思いに気付いてもらえるはずなんてなかったのに。

それでも望みを捨て切れなかった……あの日、忘れ物を届けに来た綾菜と、海斗が出会うまでは。綾香は残りのシャンパンを一気に飲み干した。喉とお腹がかつと熱くなる。

ふう、と溜息をついた綾香の後ろから、低い声が聞こえた。

『もう一杯、いかがですか?』

ぎくり、と体が強張った。聞き覚えのある声。この声は……でも、まさか。

(海斗さん!?)

ぱつと振り返った綾香の目に入ったのは、シャンパングラスを両手に一つずつ持った、見知らぬ男性だった。

『え……?』

綾香は目を見張り、そつと差し出されたグラスに目を向けた。黒の礼服姿の男性は、綾香の左手に新しいグラスを持たせると、空になったグラスを取り上げ、傍にいたボーイに渡した。流れるような一連の動作に、綾香はぼうつと、されるがままになっていた。

(この人……誰?)

見覚えがないということは、海斗側の招待客だろう。海斗も長身だが、この男性も背が高い。おまけに……

(こんな綺麗な人、会ったことがない……)

端整だが、どこか野性味を感じさせる顔立ち。そんな彼が漂わせる艶っぽい雰囲気、吞まれそうになる。ふつと微笑まれ、綾香の頬は瞬時に熱くなった。

『花嫁のお知り合いですか?』

……似てる。低くて甘い声が、あの人——海斗さんに。

綾香は一瞬言葉を出せなかった。

『あの、私……』

言いかけて、すぐに口をつぐんだ。

この人が誰かは分からないが、これほど声が似ているということは海斗の親戚筋だろう。ならばあまり自分のことを言わない方がいいかもしれない。

実は自分達姉妹は、名字が違う。水瀬綾香と大谷綾菜。父親が違うせいだが、下手に名乗ったりすればそこから家庭環境の話にならないとも限らない。何もおめでたい席でそんな話をする事もないだろう。

綾香は男性に向かつてにつこりと微笑んだ。

『……ええ、そうです。あなたは？ 新郎のお知り合いですか？』

曖昧に答え、逆に質問を返す綾香に、男性の瞳が面白がるように光った。

『そうです。俺が海外出張に行っている間に、結婚が決まっていたことには驚きましたが』

カツン、と、綾香のグラスに男性のグラスが軽く触れる。

『……新郎新婦の幸せを願って』

ええ、と頷いた綾香は、金色のシャンパンを飲み干す。爽やかな泡が喉元を通り過ぎる。何だか足元がふわふわしてきた。男性は、そんな綾香をじっと見つめている。

(……何かしら)

今までこんなに男性にじろじろ見られることなどなかった。普段なら、居心地悪く感じていただ

ろうが、アルコールの力が綾香の心を麻痺させていた。

『何か？』

首を傾げた綾香に、男性はくつくつ……と笑った。その笑い声に、綾香の指先が震える。

『いえ。あなたの態度が新鮮だったもので』

『新鮮？』

どういう意味だろう。特に何もしていない気がするけれど。

綾香は訳が分からず、男性の顔を見上げた。

『今まで俺の周りには、あなたみたいな女性はいなかったな』

『はあ、そうですか……』

よく分からないが、不作法をしたわけではないらしい。アルコールで気が緩んでいた綾香は、気にせずやり過ごすことにした。

『この後、予定はありますか？』

『いえ……特には』

そう。もう『家で妹が待っているから』と言って早く帰らなくてもいい。

ずきんと胸の奥が痛む。

『もし良ければ、場所を変えて飲み直しませんか？ このホテルのラウンジも、なかなか良い酒を置いてるそうですよ』

『私……』

断ろうとした綾香の脳裏に、幸せそうな二人の姿が浮かんだ。

(今、一人になりたくない……)

綾香は思わず、『ええ』と掠れた声で答えていた。男性の口の端が満足そうに上がった。

『じゃあ、パーティーが終わったら最上階のラウンジで。……待っていますよ』

男性はにっこりと笑って、踵を返した。綾香はその場に立ち尽くし、浮かんでは消えるシャンパンの泡を見つめていた。

その後のことは正直言って、はっきりとは思い出せない。

夜景が綺麗に見える、ラウンジの窓際の席。ふかふかのソファに並んで座り、二人で飲んだ。男性の話は面白くて、会話も弾んだ気がする。

(まるで、海斗さんとデートしているみたい……)

目を瞑ると、本当にそう思えるくらい似ている。綾香はうつとりとその声に聞き惚れた。次から次へとカクテルを注文した綾香は、いつの間にか酩酊状態になっていた。

『……俺の名前は司。名前を聞いてもいいか？』

アルコールが進んだせいか、男性は随分くだけた口調になっていた。

『……綾香』

相手が名字を名乗らずにいてくれたのは、こちらとしても都合が良かった。

『綾香……いい名前だ。色っぽくて、よく似合っている』

『色っぽい？ 私が？』

綾香は首を傾げながら隣に座る司を見た。

『……ああ。思わず俺が声をかけてしまうぐらいに。あんなことは初めてだった』

『初めて？ まさか』

あんなにスマートに話しかけてきたのに。

眉をひそめた綾香の頬を、彼の長い指が撫でた。

『……本当だ。俺は自分から女性に声をかけたことはない……さっきまではな』

『声をかけなくても、寄ってくるんでしょうね……あなた、モテそうなもの』

ふふつと司が笑う。

『それは否定しないが……俺目当て、というわけでもないからな。大抵は、俺のバック狙いだ』

『ふうん？』

酔っていた綾香は、司の言葉を特に気にも留めなかった。海斗の親戚なら良家の生まれであると想像がつく。

『だから、媚を売らない綾香が眩しかった』

綾香

その言葉に込められた熱に、背筋がぞくりとした。

こんな風に海斗にも呼んでほしかった。胸が締め付けられるように痛くなる。

しばらくした後、司が腕時計を見た。

『……そろそろこの店も閉まる。帰るなら送っていい』

あの部屋に？ もう、綾菜が帰ってこない部屋。だって、綾菜は……綾菜の隣には……
テーブルの上に置いた拳をぎゅつと握りしめた。胸がずきずきと痛む。理性で抑え込んでいた感情がアルコールの魔法で溢れ出す。

『一人に……しないで』

——今夜だけは。一人でいたくない。この胸の痛みを抱えたまま、あの部屋に戻りたくない。目を瞑った綾香の肩を、大きな手がふわりと抱いた。

『……分かった。俺がいる。一人にはしない』

ふつと体の力を抜いてもたれた逞しい胸は、とても温かった。

「ううう……」

翌朝、目を覚ました綾香は、ベッドの上でずきずきと痛む頭を抱え込んだ。

昨夜の出来事がよみがえってくる。普段の自分なら、初めて会った男性と絶対にあんなことしないのに……！ 恥ずかしくて、今日一日このままベッドの中に潜り込んでいたいぐらいだ。

(もう絶対お酒は飲まないっ！)

昨日の男性——司の瞳や表情をまざまざと思い出した綾香は、思わず胸の前で拳を握りしめた。その胸がじくじくと痛い。

(傷付けてしまったわよね……)

最後に見た司は、怒りに燃える瞳で憎々しげに綾香を睨んで立ち去った。

でも、そうされても仕方のないことをした。誘いに乗っておいて、他の男性の名前を呼ぶなんて。暴力を振るわれなかっただけでもラッキーだったと思わなければ。

綾香はきゅつと唇を噛んだ。

(海斗さんの親戚とはいえ、そうそう会うこともないだろうけれど……もしかた会えたら)

ちゃんと事情を話して謝ろう。いつになるかは分からないが、その時までにはこの胸の痛みにも慣れて、冷静な自分でいられるだろうから。

綾菜と海斗は、これから長期ハネムーンに旅立つ。行き先は南ヨーロッパで、期間は二ヶ月。気持ちの整理をつける時間としては十分だ。

(その間に私は、二人の前で笑えるようにならなくちゃ)

むくりと綾香は体を起こした。枕元の目覚まし時計は午前五時を指していて、まだ窓の外は暗い。今日は通常通り出社しなければならない。二日後には、長期休暇を取る海斗の代わりに、藤堂家から社長代理となる人物が来る予定になっている。それまでに、段取りを整えてしまわないと。

(普段、藤堂家の力は借りたくないと言っている海斗さんにしては、珍しい決断だったわよね)

綾香は海斗の言葉を思い出した。

『じいさんから言われてね。結婚の時ぐらい、私を頼れ。お前は私の孫なのだから』って。じいさんが社長代理を派遣してくれるおかげで、俺の長期休暇が取れたようなものなんだ。誰が来るのかはまだ決まっていらないみたいだが、多分藤堂カンパニーの重役クラスの人間が来ると思う。綾香

も大変だろうけれど、サポートしてほしい』

藤堂財閥の総本山と言える藤堂カンパニーは、国内有数の大企業。そして「じいさん」とは、藤堂財閥の会長だ。その会長が派遣する役員が、社長代理として小野寺商事に来るといふ。落ち度があつてはならない。

（そうよね、せめて社長秘書としてきちんと役目を果たさないと。秘書に取り立ててくれた海斗さんのためにも）

ぶんぶん大きく首を振った綾香は、ベッドから下りて大きく伸びをした。べちべちと両手で頬を叩き、気合いを入れる。ひとまず個人的な感情は置いて、仕事に専念しなければならない。

「――よし、頑張ろう！」

綾香は気持ちを切り替えて、朝食の用意をすべくキッチンの方へと歩き出した。

* * *

二日後の朝、綾香は秘書室で室内のチェックをしていた。それを終えると、入り口近くにある姿見の前に立つ。

いつものように長い黒髪を後ろで一つに括り、細いストライプが入った紺のスーツを纏っている。これまでと変わらない冷静な秘書の姿がそこにあった。

始業時間は九時だが、綾香はいつも七時半には出社し、社長室の掃除をしていた。それからメー

ルと郵便物を確認し、社長である海斗の出勤を待つ。今日もその一連の流れを終えたところだ。

（引き継ぎ資料はもう用意できているから、後は……）

秘書室から社長室に繋がるドアを開け、中へ入った綾香は、ぐるりと周囲を見回した。部屋の一番奥にある社長机は、艶やかなマホガニー製。

実用的なものを好む海斗は、室内の備品をスチール製にすることが多かったが、この机は祖父である会長が贈ってくれたものらしい。どっしりとした質感が、高級感を漂わせていた。

部屋の中央に配置された四人掛けのソファセットは、先週末に専用のクリーナーで拭いておいたおかげで、黒い革の艶が一層増していた。

社長机の後ろに設えた本棚のガラスにも曇りはなく、床にはチリ一つ落ちていない。入り口のドアの右手にある大きな窓からは、金色の朝日が差し込んでいた。

「これでいつ来られても大丈夫ね」

秘書室に戻った綾香は、壁に掛けられた時計を見た。八時半、と確認したところで廊下側のドアがノックされる。

（もういらしたのかしら）

綾香はドアに近付き、秘書らしい落ち着いた笑みを浮かべてドアノブを引いた――途端、全身が凍り付いた。

「お前っ……!?!」

男性の声が秘書室に響く。綾香は目を大きく見開き、ドアの向こうから現れた人物を呆然と見上

げた。

「あ……なた、は」

黒いスーツに包まれた長身に、思わず見とれそうなくらい端正な顔立ち。そして……海斗によく似た低い声。

(うそ……っ……！)

そこにいたのは、まさしく二日前に過ちを犯しかけた相手——司だった。その彼が、信じられないといった表情で自分を見下ろしている。

——そうそう会うこともないと思っていたのに。

あの夜、熱い欲情を帯びていた瞳が、今は氷のように冷たく感じられる。軽蔑にも似たその瞳の色に、綾香の胸は痛んだ。

一方、司は、黙ったまま突っ立っている綾香を見下ろし、忌々しげに口元を歪めた。先に彼の方が冷静さを取り戻したらしい。

(もしかして……この人が、海斗さんの言っていた社長代理！)

信じたくはなかったが、それ以外に彼がここにいる理由は考えられない。

綾香は、すかさず「秘書」の仮面をつけた。

その直前、思い出すまいとしていたあの夜の行為が胸を過ぎった。が、すぐにそれを振り払い、すうっと息を吸って吐く。

「……社長秘書の水瀬綾香です。よろしくお願いいたします」

そう言っつて、他人行儀に頭を下げた綾香をせせら笑うように、目の前の司が言った。

「……俺は、藤堂司。今日から海斗の代わりを務める、藤堂カンパニーの専務……お前の「大それた」社長の従兄、だ」

嫌味な言い方に、ぐっつと綾香の息が詰まる。思わず睨み付けてしまったが、すぐに冷静さを取り戻した。

「そのように、社長から聞いております。社長が戻られるまでの二ヶ月間、精一杯補佐させていただきます」

そう答えた綾香を見る司の目は、優しいとは言えなかった。

「お前みたいな秘書を選ぶとは……あいつ、社長としては大したことないんだな」

(海斗さんを批判するの!?)

綾香はキツと司を睨んだ。

「私のことで、社長を批判されるのはおやめ下さい。社長には関係ございません」とすると司は、ふん、と鼻を鳴らして言葉を続けた。

「あいつには、以前から仕事の話になるたび『俺の秘書は本当に優秀で助けられてる』と聞かされていたんだ。その「優秀さ」とやらを証明してみる。俺は人事権も行使できる。秘書として使いたいならなかったら、遠慮なく異動させるからな。覚悟しておけ」

綾香は、ぎゅゅと唇を噛みながらも、「はい、承知いたしました」とまた頭を下げる。そして司の先に立って、社長室のドアを開けた。

つい、と司が大股歩きで社長室に入った。綾香も続いて入室し、ドアを閉める。いつもは海斗が座る席に、司がどかっと腰を下ろした。そして艶のある机に肘をつくど、目の前に立つ綾香を無言のまま見上げた。

綾香は何食わぬ顔で、今後の業務についてのメモを読み上げる。

「……引き継ぎの資料はすでにご用意しております。それから本日のスケジュールですが、午前十時より……」

「全部キャンセルだ」

「は？」

綾香は顔を上げ、司の顔を見た。

「二度言わせるな。今日の予定はよほどの急務でない限り、全部キャンセルしろ。その代わり……」

じろり、と冷たい目で綾香を睨む。

「今進行中の商談やプロジェクト関連の書類を全て見せろ。チェックし直す」

（私を全く信用していないのね、この男は）

腸が煮えくり返るのを押し隠して、綾香はいつもの冷静な笑みを浮かべた。

「……承知いたしました。すぐにお持ちいたします」

深々と礼をし、社長室から出ていく綾香は、背中に強い視線が突き刺さるのを感じていた。

（なに、あの男……っ!!）

確かに、あの時悪かったのは自分だけけれど、あの感じの悪さはなんなのか。万が一会うことがあれば謝ろう、と思っていた自分が馬鹿みたいだ。

（傷付けたんじゃないかって……反省していたのに）

恐ろしく元気そうだった。おまけに、あの視線。どうやら綾香が傷付けたのは、彼のプライドだけだったらしい。

（それにしたって……）

秘書としての能力まで疑われては、海斗に申し訳ない。綾香のプライドにも火がついた。このまま、尻尾を巻いて逃げるわけにはいかない。

ぱぱぱと資料を集め、再び深々と頭を下げて社長室に入る。どん、と社長机に資料を置いた綾香は、にっこりと秘書スマイルを浮かべて言った。

「では、私は通常業務に戻ります。ご用がおありでしたら、いつでもお呼び下さいませ」

何を考えているのか分からない瞳が、綾香を捉えた。一瞬心臓が跳ねたが、そんなことは微塵も感じさせず、笑みを保つ。

「……午前中に、鈴木商事との今までのデータを纏める。それから、このプロジェクトの進捗状況を担当者から聞きたい。後は……」

次から次へと出てくる指示に、綾香は慌てることなくメモを取って対応した。

昼食もコンビニのおにぎりにかぶりついただけで終わらせた綾香は、朝に与えられた山のような

指示をほぼ休む間もなく全てこなしてから、社長室のドアをノックした。机に広げられた資料を眺めていた司が顔を上げる。綾香は机の前に行き、深々と頭を下げた。

「お先に失礼させていただきます、社長代理」

それを聞いて、司の目がすつと細くなった。

「上司がまだ仕事中だというのに、先に帰るのか？」

その嫌味っぽい言葉に、綾香も冷静な秘書スマイルで応戦した。

「本日指示された作業は、全て終了いたしました。明日の準備も済んでおります。業務が終われば、だからだと残業せず帰宅し、英気を養って翌日に備える——というのが、我が社の方針ですから」

大体、今はもう午後八時だ。残業時間帯に何を言っているのだろうか。

「……酒は飲むなよ」

「は？」

聞き返した綾香に、司が睨み付けるようにして言った。

「お前は飲むとその辺りの男を手当たり次第、ベッドに引きずり込みそうだから」

「……!!」

突然、あの夜のことを持ち出され、綾香は息を止めた。

(手当たり次第って……!?)

右手をぐっと握りしめる。

(いつでも私があんなことをすると思っているの、この男はっ!?)

この一日、彼の嫌味な態度に必死に耐えていたというのに。綾香の感情が一気に爆発した。

「あの日だけですっ！ あれだって、慣れないお酒を飲み過ぎたせいです！ もう二度とあんなことは起こりませんっ!!」

「へえ……？」

薄笑いを浮かべている司の顔を、思いつき殴りたい衝動をどうにか堪え、綾香は努めて冷静な声で言った。

「……確かに、あの夜のことは私の過ちです。申し訳ございませんでした。私はもう忘れかけたか、社長代理もどうかお気になさらないで下さい」

きっぱり言い切ると、再び頭を下げ、かつかつとヒールの音も高らかに社長室から出ていった。

* * *

「つたく……」

帰宅してシャワーを浴びた後、Tシャツに短パン姿で、濡れた頭にタオルを巻く。

そんな色気のない格好で冷蔵庫を開けた綾香は、発泡酒の缶に触れる。が、すぐに思い直して隣のオレンジジュースを手に取り、リビングのソファに腰を下ろした。

(悔しいっ……!!)

今思い出しても、腹が立つ。今日の自分は、秘書として完璧だったはずだ。胸の中で荒れ狂う感

情だって、一かけらも表には出さなかったはず……なのに。

「いちいち嫌味を言うし、なんなのあの男はっ!!」

ぷしゅ、とプルタブを引き上げ、ぐびぐびとジュースを一気飲みし、空になった缶をダン、とテーブルに叩き付けるように置く。

「あああ、もうっつ、本当に人生最大の不覚だったわっ!!」

あの夜、どうしてあんな男に縋ってしまったのだろう。同じ声でも、あの嫌味な男と優しい海斗では大違いなのに。

(そりゃ、仕事ができるってことは認めるけど)

今日一日傍にいただけで、司の優秀さは身に染みて分かった。こちらへの要求も高いが、司自身も慣れないはずの業務を軽々とこなしているのを見れば、文句のつけようがない。引き継ぎ資料も一度目を通しただけで理解してしまつたらしい。三十五歳と聞いているが、さすが藤堂カンパニーの専務を務めるだけのことはある——と、渋々ながらも感心せざるを得なかった。

綾香はふうと溜息をついてソファの背もたれに体を預けた。

今日は本当に疲れた。一日中、気を張りつめたまま仕事したから……おまけに、女性社員が頬を赤らめながら次々とやって来ては司についてあれこれ尋ねてくるものだから、それを捌くのも大変だった。

——綾香。

気を抜くと、あの夜聞いた司の声がよみがえってくる。その途端に、頬が、体が、かあつと熱くなる。

(いくら、海斗さんと綾菜の結婚式があつたからって……お酒を飲んでいたからって……)

誰にも見せたことのない醜態を彼に晒してしまつた。会社でも幾度となく思い出し、そのたびに気合いを入れ直す羽目になつた。今日一日、よく耐えたと自分で自分を褒めてやりたい。

(ま、まあ、向こうがけんか腰だつたから、腹が立つて落ち込んだり恥ずかしがつたりする暇もなかった、っていうか……)

これから二ヶ月間、彼と顔を合わさなければならぬ。ううう……と思わず呻き声を上げてしまふ。できることなら会社に行きたくない。

(でも私が職務を果たさないと、海斗さんが馬鹿にされてしまう)

それだけは嫌だ。自分の恋心はともかく、海斗の秘書としてのプライドは守らないといけない。

恥ずかしがつっている場合ではない。

馬鹿にしたような司の顔を思い出し、綾香はぎゅつと唇を噛んだ。

「……負けるもんですかあっ!!」

* * *

「水瀬さん、少し感じが変わつたかな？」

「はいっ?」

社長室のソファに座った田代工業の専務、田代雄一にそう言われ、お茶を出していた綾香は目を丸くした。

海斗と同じ三十三歳である田代と前回会ったのは、二ヶ月ほど前。その間に何か変わったという自覚はない。

「前より綺麗になったというか。いや、失礼。でも、ぱつと花が開いたような印象だよ」

意外な言葉に、綾香は少し頬が熱くなるのを感じた。

数年の付き合いになるが、いつも生真面目で冗談など滅多に言わない田代から、こんなことを言われるとは思っていなかった。

「ありがとうございます」

笑顔でお辞儀をした綾香は、次の瞬間、ピキリと凍り付いた。

(うっ……!!)

背筋を這う絶対零度の視線。顔が引き攣る。

「……例の資料、用意しておいてくれないか、水瀬」

穏やかな言葉に込められた嫌な気配。ちら、と田代の向かいに座る司を見ると、口元は笑っているのに睨み付けるような視線を綾香に向けている。

(な、何よ、その責めるみたいな顔は!!)

まるで綾香が悪い、とでも言いたげな瞳。訪問客に愛想よくしているだけに、何故睨まれないかならないのか。

(私は普段通りにしているだけなのに)

服装だっていつもの紺色スーツ、化粧もナチュラルメイク。髪型だって変えてはいない。それなのに、田代に色目を使っていると言っても言いたいのだろうか。

綾香は内心の苛立ちをぐっと堪え、必殺の秘書スマイルをたたえて、「承知いたしました」と社長室を後にした。

* * *

「んーっ……」

秘書室の椅子に座ったまま軽く伸びをした綾香は、コキコキと肩を鳴らした。

「やっと終わったわ……」

パソコンのキーボードを一心不乱に叩き続けて、何時間経ったのか。時計を見ると、午後九時前だった。

(綾菜がいないと、時間管理ができないものね……)

つい仕事に没頭してしまった。いつもなら自分を待ってくれている綾菜のことを考え、残業はほどほどにして帰るのに。

ふうと溜息をついた綾香は、今日一日の出来事を振り返る。

今日は何故か田代と似たようなことを言う顧客が多かった。出入りの工業デザイナーには「前々

から美人だとは思っていたけれど、今日は特に綺麗だね」と言われ、続いて司の前で「今度食事でどうかな」と誘われた。さすがにどうしようかと困惑したが、「まだ私が不慣れなもので。水瀬にいてもらわないと、業務が滞るのですよ」と司がさらりと断ってくれた。

とはいうものの、司が綾香を見る瞳は厳しいままだったのだが……。まだ、誰とでも寝る女だと思われているのだろうか。

むっとした綾香は、やや乱暴な手つきで机の上の資料を纏め始める。

その時、スマホの着信音が秘書室に響いた。

上着のポケットからスマホを取り出した綾香は、見慣れぬ電話番号を見て一瞬眉をひそめたものの、すぐにそれが国際電話の番号だと気付いた。

「……はい、水瀬です」

『お姉ちゃん!? 私、綾菜』

「綾菜!」

綾香は思わず声を上げた。

『どうしたの。ハネムーン中でしょ?』

『うん、お姉ちゃんの声が聞きたくなって』

「綾菜……」

じわり、と心が温かくなったが、次の言葉を聞いて顔が引き攣る。

『私がないからって仕事に没頭して、食事もロクにとつてないんでしょ!』

ぎくり、と綾香は視線を泳がせた。その通りだとは、とてもじゃないが言えない。

「ちゃん、ちゃんと食べたわよ? あなたは私のことなんて気にしなくていいから。ハネムーンを楽しんでちょうだい」

『お姉ちゃん……』

あああ……綾菜のお小言が始まりそうな予感がする。綾香は慌てて言葉を継いだ。

「ほら、長電話は、しゃ……海斗さんに悪いから。じゃあ、元気でね」

通話を終了し、スマホをしまって、ほう、と息を吐く。ハネムーン先から妹に心配される姉として……と、綾香は机に突っ伏してしまった。

「妹から電話か?」

その声に、ぱつと顔を上げる。いつの間にか、目の前に司が立っていた。綾香はさつと居住まいを直す。

「……ええ。元気そうでしたわ」

海斗の妻となった綾菜が妹だということは、司がやってきた二日目に話してある。てつきりすでに知っているのかとも思っていたが、初耳だったらしく、その時の彼は少し意外そうな顔をしていた。

じつと見つめられると、喉元のあたりがぐつと重くなった気がした。それでも綾香は目を逸らさず、司の視線を受け止める。

「お前は」

司が口を開いた。

「そんなに妹が大事なのか？」

「は？」

綾香は目を見張った。何を言っているのだろう、この人は。

「当たり前でしょう、家族なんですから。あの子が幸せになってくれることが、私の望みです」

「……」

(ど、どうしてじっと見つめてるわけ？)

居心地の悪さに、綾香は視線を逸らして椅子に座り直した。

「……今日はもう帰るぞ」

「はい」

もともとそのつもりだった綾香は、パソコンの電源を落とし、テキパキと書類を片付けた。司も社長室に一旦戻り、黒い鞆かばんを持って出てくる。

綾香も上司を待たせてはいけないと、手早く引き出しの鍵を掛けて席を立ち、ショルダーバッグを肩にかけた——ところで、がしっと左腕を掴まれた。

「は、い!？」

目を丸くして司を見上げる。彼は感情の読めない表情のまま、低い声で言った。

「食事に行く。付き合え」

「え？ あ、あの、私、帰宅してから……」

じろりと司に睨にらまれ、綾香は言葉を詰まらせた。

「妹に食事の心配をされているんだろ。部下の健康を管理するのも、上司の役目だ。ほら、行くぞ」

「え、あの、ですな……っ!？」

司にずりずりと強引に引きずられ、秘書室を後にした綾香だった。

「……」

「……」

(一体、何を話せばいいのよ!?)

あまりにも唐突な展開に、綾香は戸惑いを隠せない。

司に強引に車の助手席へ押し込まれて連れていかれた先は、郊外にあるお洒落しゃれなイタリアンレストランだった。個室に案内された綾香は、とりあえずバジルのパスタとグリーンサラダを注文した。静かなクラシック音楽が流れる空間。白を基調とした内装で、壁にはイタリアの国旗が飾ってあった。確か三ツ星ホテルで修業したシェフが開いたお店じゃなかっただろうか。友達の誰かがそんなことを言っていた気がする。

まずはサラダが運ばれてきたので、綾香は「いただきます」と手を合わせてから口をつけた。しばらくすると、いい香りが立ち上のぼるパスタも運ばれてきた。

(こうなったら、たっぷり食べてやるんだから!)

気まずい雰囲気の中、じつと自分を見つめる司の視線を気にしつつも、綾香は食事に精を出した。評判のレストランだけあって、パスタもサラダもとても美味しい。向かいにいるのが仏頂面した上司でなければ、もっと美味しく食べられるのに。

司はというと、アンチョビピザをつまみながら、時折ミネラルウォーターを飲んでいる。

二人とも黙ったままだ。何とも居心地が悪く少し身じろぎすると、司が話しかけてきた。

「食欲はあるようだな」

「ええ、おかげさまで」

司の心は読めない。綾香は一旦フォークを置いて、ミネラルウォーターをこくり、と口に含んだ。すると司が再び口を開く。

「——水瀬綾香。二十七歳。短大卒業後、秘書候補として小野寺商事に入社。二十二歳の時に、社長である小野寺海斗の秘書に抜擢される。社内での評判は高く、誰に聞いてもよくできた秘書だと高評価だった」

「は？」

綾香はグラスを置いて、司を見た。司は表情を変えずに言葉を続ける。

「高校生の時に母親を亡くし、年の離れた妹の世話をしてきたそうだな。だから残業もあまりできなかったが、その代わりに効率よく業務を回すことで対応してきたと聞いた」

「……」

その通りだけれど、それがどうかしたのだろうか。司の意図が掴めず、綾香は黙って向かいの相

手を見つめた。

「海斗の結婚相手が、お前の妹だったと聞いた時は少し驚いた」

海斗の名前が出たせいで、一瞬自分の顔が強張るのが分かった。が、綾香はすぐに平静を装う。

そんな綾香を司はなおも追及してきた。

「妹の幸せを願っていると、そう言ったな。それは本当か？」

「っ!？」

思わず息を呑んだ。それではまるで綾香が、綾菜と海斗が破局するのを望んでいるようではないか。綾香はキッと司を睨み付けた。

「ええ、本当です。あの子だって苦労してきたんです。なのにとっても素直ない子で……だから」

だから幸せになつてほしい……と言いかけた綾香は、司の瞳がざらりと光るのを見て言葉を呑み込んだ。

「だから……のか」

司が小さく呟いた言葉は、上手く聞き取れなかった。綾香が眉をひそめると、司は大きく溜息をつく。

「さっさと食べる。食べ終わったら家まで送る」

「……は？」

別に送ってくれなくてもいい、とは言い出せず、綾香は再び銀色のフォークを手に取ったのだった。

「……ご馳走様でした」

会計を終えた司に、綾香はべこりと頭を下げた。司はそれに軽く頷いて応え、そのまま店に隣接した駐車場へ歩き始める。

先に歩く司の背中を追いながら、綾香はまた溜息をついた。

(疲れた……)

残業よりも氣力を奪われた気がする。肩に掛けたシヨルダーバッグの紐をきつく握りしめた。氣まずい雰囲気のまま終わった食事。最後の方は、味なんてほとんど分からなかった。おまけに自分の分は払うと言ったのに、結局司に「いいから」と押し切られてしまった。

(大体、どうして誘われたのか全然分からないだけ)

司が助手席のドアを開ける。綾香としては近くの駅で降りしてほしいのだが、司は家まで送るといつて聞かなかった。

(この人、唯我独尊を地で行っているんじゃないの!?)

ぶつぶつと心の中で文句を言いながらも、とりあえず「ありがとうございます」とお礼を言うのは忘れない。

座り心地のいいシートに腰を下ろして自宅までの道のりを告げると、司は無言で車を発進させた。彼の車は、銀色の国産スポーツカーだった。静かな運転に、緊張していた綾香も肩の力を抜く。

「……」

ちらりと横を見れば、街の灯りに照らされ、司の端整な横顔が薄闇の中に浮かび上がる。ハンドルを持つ骨ばった手を見た時、どくん、と心臓が跳ねた。

——あの手が、指が……優しく触れて……

頬にかあつと熱が集まった。慌てて、窓の外へ目を向ける。

(だめ、思い出しちゃ……っ)

疲れているせいか、秘書の仮面が剥がれかかっている。司の持つ艶っぽい空気に、反応してしまふ。綾香はぎゅっと目を瞑り、氣持ちを落ち着かせようとした。

(一、二、三、……)

心の中で数を数え始めた。それだけに意識を集中させる。

(十五、十六、十七……)

スポーツカーにしては静かな振動に揺られながら、綾香はひたすら数を数え続けたのだった。

(百二、百三、百四……)

「おい、着いたぞ」

「ひゃあっ!？」

低い声に驚いて、変な声を上げてしまった。目を開けると、間近に司の顔がある。いつの間にか車は停まっていた。司は何故か運転席から身を乗り出し、綾香に覆いかぶさるように両手をついている。

かちやり、と司が綾香のシートベルトを外す。綾香は目を見開いたまま、ただ司の顔を見上げる
ことしかできない。

〔顔……近いっ……〕

司の瞳がざらり、と光った気がして、背筋がぞくりと寒くなった。

「……お前、今酔っていないよな？」

「え？」

何のことかと綾香が聞こうとした瞬間——唇が塞がれていた。

（——!!）

必死に両手で彼の胸を押したが、びくともしない。司の熱い唇が、食むように綾香の唇の上を
動く。

「んん……っ、ふ……うん……!!」

下唇を甘噛みされ舌でなぞられると、ぞくつと体が震えた。甘い痺れに、手から力が抜けていく。

「やっ……ん……」

少し開いた唇の隙間から、司の舌が侵入してきた。歯茎を器用に舐め回し、ねっとり綾香の舌
に纏わりついてくる。粘膜と粘膜が擦れ合い、時折吸い付かれて、何も考えられなくなった。

誘うような熱い舌の動きに翻弄されているうちに、大きな手がスーツの上着の下に潜り込んでく
る。薄いブラウスの上から丸い膨らみを掴まれて、綾香は我に返った。

（なっ、なに……っ!!）

ばし！ と、咄嗟にシヨルダーバッグを司の側頭部に当て、体をひねる。すると彼はむっとした
ような表情を浮かべた。

「何をする」

「な、何をするじゃないでしょうっ!! 何してるんですか、あなたこそ!!」

完全に秘書の仮面が剥がれ落ちてしまった綾香は、息を切らしながら叫ぶ。司はしれっとした態
度で答えた。

「あの夜の続きだが？」

「なっ」

かっ頬が熱くなる。わなわな震える綾香を、司の面白がるような瞳が捉えた。

「お前はもう忘れたと言ったが、俺は忘れないぞ。あの時のお前の甘い声も……白い柔らかな
体も」

「……っ、何言ってる……っ!!」

ちゅ、と短いキスが落とされた。あまりにも自然なその行為に、言葉が止まった。

「だからこれからは酔っていないお前を口説く。分かったか？」

（……この人、何言ってるの!? 口説くって!?）

綾香の頭の中は完全に真っ白になっていた。

くっくっく……と司が笑う。

「お前でもそんな顔するんだな。ぼかんと口を開けたままの、可愛い間抜け顔」

ぱつと両手で口を覆った綾香を、妖しい光を宿した瞳が見つめる。
 「今日はここまでにしておいてやる。これから覚悟しておくんだな」
 司はすつと手を伸ばして、助手席のドアを開けた。綾香は半ば転がるように車から脱出する。
 「じゃあ、また明日」

にやり、と肉食獣の笑みを浮かべた司は、そのまま静かに車を発進させた。綾香は呆然とアパールの入り口で立ちすくみ、それを見送るしかできない。

(何だったの、今の!?)

唇に手を当てる。熱を持ったそこは、ほんの少し腫れている気がする。やがて真っ白になっていた綾香の頭は、次第に怒りで沸騰し始めた。

「忘れないって……口説くって……一体何様よっ!!」

思わず叫んでしまった綾香は、はつとして辺りを窺い、近所迷惑になっていないか確認する羽目になったのだった。

* * *

「……綾香!? おはよう。珍しいわね、この時間にロビーで会うなんて」

「おはよう、碧……」

息を切らして会社に入った綾香は、同期の早見碧と並んでエレベーターを待った。

(ああもう! あの男のせいだ!)

いつもなら、もうとつくに席に着いている時間なのに。今日は定時の二十分前……いつもは一時前半前に出社する綾香にとって初めての黒星だ。

昨夜は腹が立って、むしゃくしゃして、おまけにキスされた唇が熱くて、なかなか寝付けなかった。おかげで珍しく寝坊し、いつもきちんとまとめているセミロングの髪も下ろしたままだ。

「ねえ、綾香? あなた感じ変わったよね。社長代理のおかげなの?」

「え?」

綾香は隣に立つ碧を見た。髪を肩のあたりでくると巻き、淡いイエローのワンピースを着た碧は、可愛い外見ながらもしつかり者だ。そんな彼女が綾香を見て、うんうんと頷く。

「なんていうか……綾香ってとつつきにくい感じだったのよね。サイボーグ感満載で」

綾香の目が点になる。サイボーグ感とは何だろうか。同期で一番仲のいい友人の言葉に、綾香は戸惑うしかない。

開いたエレベーターと一緒に乗り込みながら、碧は続ける。

「けど今は、すごくいい感じになっているわよ? 生き生きしているっていうのかしら」

「そ、そう……?」

(怒りモードの間違いじゃないの?)

心の中で反論する綾香に、碧はにやりと笑って見せる。

「いいこと、思いついちゃった。ねえ、綾香。ちよつと総務部に寄って行ってよ」

「え？ でも時間が……」
普段より遅いのにと躊躇する綾香に、碧が畳みかけるように言った。
「いつもが早すぎるのよ。大丈夫、定時の五分前には席に座れるようになるから」
「ちよ、ちよっと、碧」
エレベーターが総務部のある三階に着いた途端、腕を引かれて降ろされた綾香は、そのまま鼻歌交じりの碧に引っ張られていった。

（今日、来客予定がなくて良かった……）

秘書室の姿見を覗いた綾香は、はああと深く溜息をついた。

——見慣れない顔がそこにあつた。コテでふわっとカールさせた髪は、肩にやわらかく落ち、つけまつ毛にアイラインを施した目はいつもより大きくて……普段の綾香は、ここまで化粧はしない。気後れする綾香の耳に、さつき碧に言われた言葉がよみがえった。

『大体、綾香はもったいなさすぎるのよ！ 美人なんだから、これくらいしなさいっ！』

碧はそう言って、自分のロッカーからコテや化粧品やらを引っ張り出してきて、あれよあれよという間にこのメイクを完成させてしまったのだ。

『早業……』

呆然と呟くと、『だって、始業時間に間に合うようにメイクしないといけないでしょ？』という答えが返ってきた。通勤でメイクが乱れるため、碧はいつも家ではベースメイクと眉だけ整え、

会社に来てから完璧に仕上げるのだそう。

『前から綾香を変身させたかったのよ。あ、そうそう、今日同期で飲みに行こうって話があるんだけど、綾香も来なさいよ』

『え？ 私……』

『今まで妹さんのために早く帰らないといけないからって、ほとんど飲み会にも参加していなかったでしょ？ たまにはいいじゃない』

『……そう、ね……』

今までは綾菜がいたから。でもこれからはもう……

綾香の胸の痛みを察したのか、碧がぼん、と肩を叩いた。

『今度は綾香の番でしょ？ いい加減、恋人作ったら？ 綾香が好みだって言ってる男の人、結構社内にいるのよ？』

『今は、そんな気に——』

なれない、と言おうとしたら、むにと両手で頬を引っ張られた。

『何言っているのよ！ いつ恋人を作るの!? 今でしょ！ 今しかないって！』

『み、碧……』

『大体、あんなセクシーな社長代理と一緒にいるっていうのに、もったいないわよっ！』

うぐっ、と綾香は声を詰まらせた。またあの瞳を思い出しそうになり、必死に頭から振り払う。

『そ、そんなの関係ないわよ。仕事に厳しい方だし……』

立ち読みサンプル
はここまで

（おまけに意地悪で、俺様で、わけの分からないことばっかり言うしつ）

碧はそんな綾香の表情の変化をじーっと見つめると、ふふふ、としたり顔で笑った。

『と・に・か・く！ 今日飲み会よ、準備しておいてね！』

（碧に流されたわ……）

碧は普段から、綾香が仕事一筋でいるのが気がかりだったらしく、合コンなどの企画をセッティングしようとしていた。綾香はそれを、仕事や綾菜を理由に全て断っていたのだが。

（でもたまには、同期で集まるのもいいわよね。久しぶりだし）

同期の顔を思い浮かべながら、机の上に置かれた営業部からの書類を見た綾香は、そこに書かれていた名前に目を留めた。白井圭一だ。

（白井くん、この春から営業部の課長になったのよね。頑張ってるんだ……）

同期の出世頭の顔を思い浮かべ、ふふつと笑みをこぼした時、秘書室のドアが開いた。黒のスーツを着た司が、さっさと入ってくる。

「……おはようございます、社長代理」

綾香はいつものように頭を下げた。

「ああ、お……」

（……あら？）

綾香が顔を上げると、司の動きが止まっていた。目を見開いて呆然と綾香を見下ろしている。

「あ……？」

首を傾げた綾香に、司は我に返ったように瞬きをし「……おはよう」と小さく返す。

「今日、何かあるのか？」

「え？」

綾香は目をぼちくりさせたが、そういえば、と今の自分のメイクを思い出した。

「え、ええ……今日、同期会が」

「同期？」

「久しぶりなので、楽しみにしているんです。前々から誘われていたんですけど……」

司は沈黙したままだ。何を考えているのか、全く読めない。ただ綾香を見下ろす瞳がぎらついていっているような気がした。

（な、何とかして、この空気……どうして睨まれているの、私!?）

綾香は思わず顔を引き攣らせる。

「なら、とつと仕事を終わらせるんだな。昨日より多くなるが。……無理ならいいんだぞ？」

海斗が同じことを言ったなら、優しさとして受け止められただろうが、司の場合は皮肉にしか思えなくて、かちんときた。

（用事があるって分かっている、わざと仕事を増やす気なんだわっ！ そっちがその気なら、受けて立つわよっ！）

つん、と顔を上げて、司の瞳を正面から見上げた。